社会民主主義者が大規模資本主義を進歩的現象と見なしているわけ

わが急進主義者たちは、資本主義は［人民的体制」に矛盾するという、ありふれた思想から出発する。そして、社会民主主義者が大規模資本主義を進歩的現象とみなしており、現代の略奪制度にたいする闘争のために、まさにこの大規模資本主義に立脚しようと欲していることをみとめると言うと、彼らは、それ以上とやかく論議することなしに、社会民主主義者のことを、農民住民大衆の利益を無視するものだとか、「あらゆる百姓を工場の釜のなかで煮つめよう」と欲するものだとか言って、非難する。……（かっては平等であった家父長制的な直接的生産者の富者と貧者とへの分解と商人資本の発生により、勤労者を容赦なく抑圧している―青山注）この大ぜいの農村小搾取者たちは、恐るべきカをなしている。恐るべき、というのは、とくに彼らが勤労者を一人一人、各個に圧迫し、勤労者を自分にしばりつけ、解放のあらゆる希望をうばい去っているからである。また、恐るべきというのは、ここに記述している制度に固有な低い労働生産性と交通の欠如とから生じる、農村の未開状態のもとでは、この搾取は、たんに労働の略奪であるだけでなく、農村でつねに見うけられる、人格にたいするアジア的侮辱でもあるからである。そこで、もしこの**現実の**農村とわが資本主義とを比較するなら、諸君はつぎのことを理解されるであろう。すなおち、資本主義が、これらの小さな分散した市場を全ロシア的な一つの市場に結集し、おびただしい善意の小吸血鬼のかわりに、ひとにぎりの大きな「祖国の柱石」をつくりだし、労働を社会化してその生産性を向上させ、また、地方の吸血虫にたいするこの勤労者の隷属をうちやぶって大**資本**への隷属をつくりだすとき、なぜ社会民主主義者がわが国の資本主義のこの作用を進歩的と考えるか、ということである。大資本への隷属は――労働の抑圧のもたらすあらゆる恐怖、すなおち、死滅、野蛮化、婦人や子供の肉体組織の不具化、等々にもかかわらず――小吸血鬼への隷属にくらべれば進歩的である。なぜなら、それは、**労働者の思想を目ざめさせ**、漠然とした不明瞭な不満を意識的な抗議に転化させ、分散した小規模の無意味な一揆を、全勤労者の解放のための組織的な階級闘争に転化させるからであり、そして、この闘争は、この大規模な資本主義の存在条件そのもののなかから自己の力を汲みとり、それゆえにまた**確実な成功**を無条件に期待しうるからである。

農民大衆を無視しているという非難にたいする回答として、社会民主主義者は、完全な権利をもってカール・マルクスのつぎの言葉を引用することができる。

「批判は鎖をかざる想像の花をむしりとってしまったが、それは、人類に、空想の鎖を負ってゆかせうるためではなく、彼らに鎖をふりすてさせ、生きた花を摘ませるためである。」〔『ヘーゲル法哲学批判序説』補巻４、174 ページ〕

ロシアの社会民主主義者は、わが農村から、それをかざっている想像の花をむしりとり、理想化や空想にたいしてたたかい、そして、「人民の友」が社会民主主義者をおそろしくきらう原因である、あの破壊活動を実行している。――だが、これは、農民大衆を、こんにちの抑圧され、死滅しつつあり、隷属化されている状態のままにとどまらせるためではなく、いたるところで勤労者を束縛している鎖はどんなものか、この鎖はどのようにしてきたいあげられるかを、プロレタリアートに理解させ、そして、この鎖をふりすて、ほん

とうの花を摘むために、この鎖に反抗してたちあがるすべを、彼らに理解させるためである。

その地位からしてただひとり階級的自覚をわがものにし、階級闘争を開始することのできる勤労者階級のかの代表者たちに、社会民主主義者がこの思想をもたらすと言うと、――百姓を釜のなかで煮つめようと欲するものだ、と言って非難されるのだ。

だが、だれが非難するのか？――

自分では、「政府」や「社会」に、つまり、いたるところで勤労者を鎖につないできたあのブルジョアジー自身の機関に、勤労者の解放にかんする期待をかけている人たちである！

このようななめくじどもが、社会民主主義者には理想がないなどと言って、いばっているのだ！　　第一巻　「人民の友」とはなにか　P240~244

コメント

大資本への隷属は――労働の抑圧のもたらすあらゆる恐怖、すなおち、死滅、野蛮化、婦人や子供の肉体組織の不具化、等々にもかかわらず――小吸血鬼への隷属にくらべれば進歩的であること。なぜなら、それは、**労働者の思想を目ざめさせ**、漠然とした不明瞭な不満を意識的な抗議に転化させ、全勤労者の解放のための組織的な階級闘争に転化させるからであり、この大規模な資本主義の存在条件そのもののなかにプロレタリアートの**確実な勝利があ**るからである。

この文章に関連して、日本農業をめぐる状況をみると、現在の日本の農民は――ブルジョア政党（自民党）が資本主義の幻想を保ち、票をかすめ取るために、みんなを殺さず生かさずという――生殺しの状態にされている。その結果、低い労働生産性と農地の荒廃の基で農民の小ブルジョア意識が保たれている。資本主義的農業を経ずに現在に至っている日本農業と農民は、日本資本主義が余裕をなくした中で、どこへ向かうのか、マルクス主義者はどう対応すべきか、を深く研究しなければならない。小ブルジョアへのご機嫌取りに終わってはならない。